

「アジア諸文字の タイプライター」展 を巡って

荒川慎太郎 あらかわ しんたろう / AA 研

「アジア諸文字のタイプライター」展。

実に直球勝負なタイトルの展覧会を2015年に実施した。

この展覧会はいかにして誕生したのか、どんな企画があったのかを
企画者が振り返る。

●タイプライター展が開催された

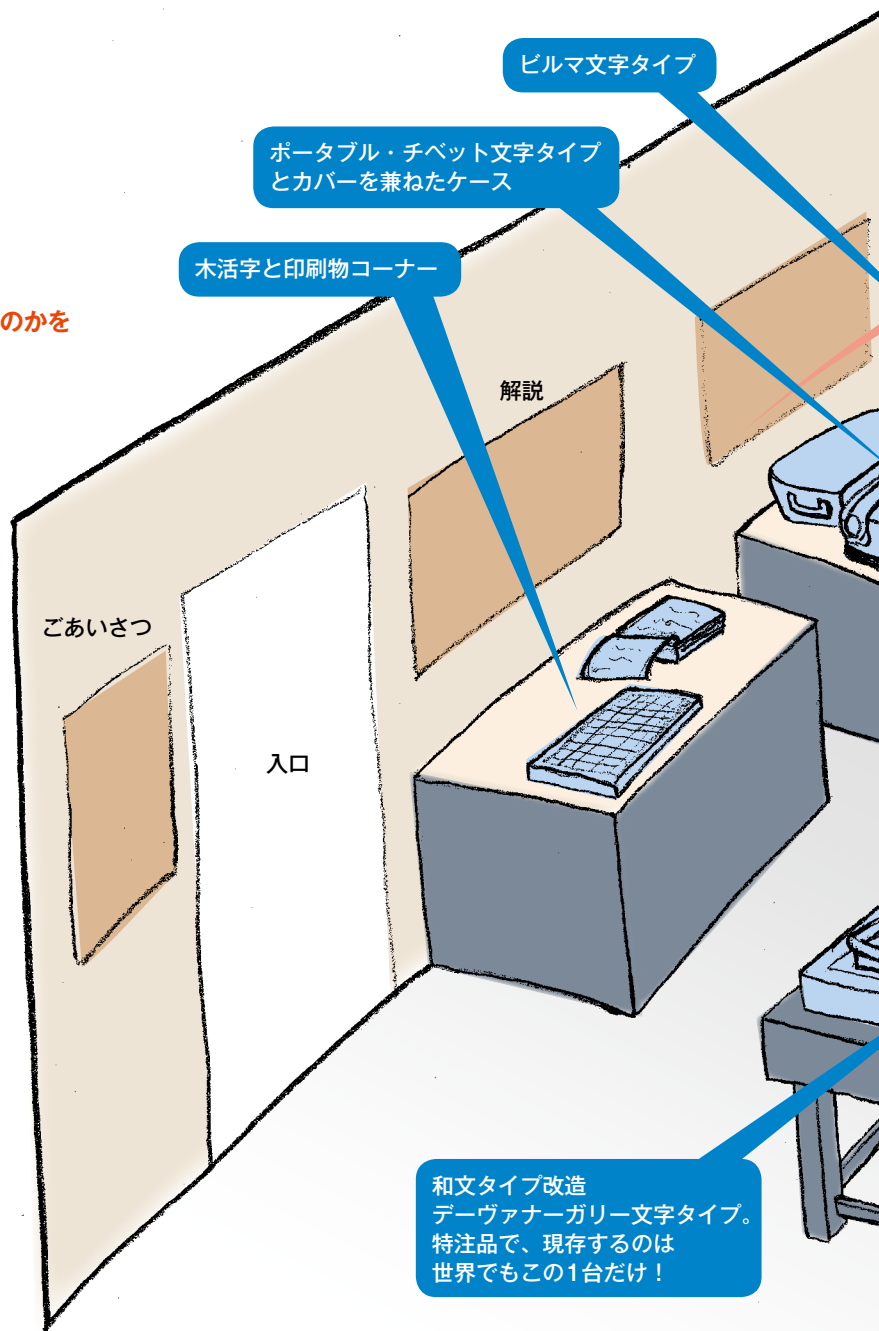
「アジア諸文字のタイプライター」展は2015年10月26日～11月27日、東京外国語大学AA研一階資料展示室で開催された。この一文が印刷物となるのは2016年7月と聞く。読者の目に触れるのはさらにその後になるだろうから、一年近く前に終了した展覧会となる。展覧会をご覧になった方にとっても、企画者の私でさえも、相当記憶が薄れていると思う。タイプライター展に一番長く関わった者として、展覧会開催の経緯や意図した所を記しておきたい。

●タイプライター展を企画する

私は、西夏文字・西夏語という古代文字・言語の研究を行いつつ、所属するAA研の研究プロジェクトグループ「GICAS (Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成)」の担当長を務める。GICASは、アジアのさまざまな文字による書字文化資料を用いて、文字学・文字情報処理学・文献学などの研究活動を実施するかたわら、これまでに「アジア文字曼陀羅—インド系文字の旅」「アラビア文字の旅—線と点」「好奇展—漢字と東アジアの文字周遊」という、アジアの文字に関わる展覧会を開催してきた。展示品の一部に、欧文タイプを改造してアジアの各種の文字を打てるようにしたタイプライターがあった。展覧会后、これらのタイプは他の展示品とともに、所内の一室に収蔵…というか無造作に転がされていた。特にぞんざいに扱われていたわけではなからうが、ホコリまみれで、明らかに損傷しているタイプもあった。



会場入り口より。



展覧会場図解

(絵・荒川慎太郎)



デーヴァナーガリー文字タイプ大型と会場風景。

ベンガル文字タイプ (左)
とデーヴァナーガリー文字
タイプ中型 (右)。

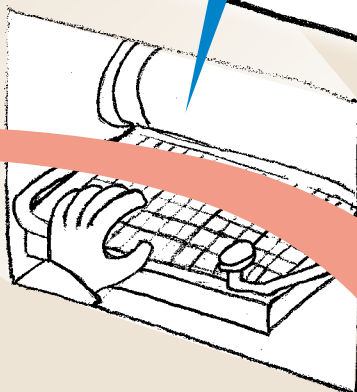
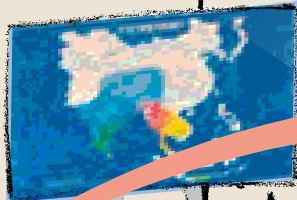


デーヴァナーガリー文字
タイプ中型のキー拡大。

チベット文字・ビルマ文字タイプ
で作られた語学テキスト

デーヴァナーガリー文字タイプ
を操作する動画を映してみた

インド系文字分布図



ベンガル文字タイプ

欧文タイプ改造
デーヴァナーガリー文字タイプ

ウルドゥー文字タイプ

アラビア文字タイプ

ヘブライ文字タイプ

時計回りに
言語・文字が
「東→西」となるよう
配置されている

写真1
分解清掃中のビルマ文字
タイプ(左)とチベット文
字タイプ(右) (2013年
11月)。



図版1
デーヴァナーガリー
文字の母音表記の例
(『図説アジア文字入
門』16頁より)。



所内でもほぼガラクタ扱いのタイプライター。私も当初、専門とする言語のものではないため、どの程度貴重な機械なのか認識していなかったが、一箇所に集めて素性を調べてみるとなかなか値打ちのあるものとわかった。数年のうちにこれらの技術遺産(?)を活用した展覧会ができないかという願望を持った。

●タイプライターを直しておく

事前準備の予算が潤沢ではなかったので、二年にわけてタイプの整備と修理を行った。お世話になったのは、日本でほぼ唯一の専門業者「尾河商会」である。技師の方が来所され、一日かけて清掃と整備を行ってくれた。責任者としてこの作業に立ち会った所員は私だ。機械類は好きなほうなので、タイプが分解され、内部のメカニズムを実見できたのは嬉しかった(写真1参照)。

技師の方によれば、半数以上のタイプが使用可能、または一部の機構が稼働可能であることがわかった。後述のデーヴァナーガリー文字タイプ大型は、機構の一部が故障し、通常の欧文タイプのように「左→右」の入力ができない。しかしもともと和文タイプを改造したものであり、「上→下」という入力が可能だった(この機構がかろうじて残っていたため、後に、デーヴァナーガリー文字入力方法を解説する動画撮影が可能になった)。

タイプ修理は「完全に稼働するまで修理する」、「清掃と軽い整備のみ」という段階に分かれる。今回は(予算的にも、展示という用途的にも)後者の段階にとどめた。しかし専門技師や部品が残るうちに、可能な限り修理しておくのが望ましいのは言うまでもない。

●タイプライターの工夫を学ぶ

展示品の中でもひととき大きく、機構が複雑で、貴重な一品が、「和文タイプ改造デーヴァナーガリー文字タイプ」である。もともと日本でしか製造・販売されていない和文タイプライターを、二台だけ特注で改造したもの。そして現存するのはこれ一台。つまり世界唯一。どうしてこんなタイプライターが生まれたのか? それはインド系文字の特徴に起因する。

インド系文字は表音文字とはいえ、ラテンアルファベットのように、発音の順にほぼ直線的に文字が並ぶという単純なものではない。インド系文字の多くは母音-aを含む音節文字を「基字」とし、-a以外の母音を表わすときは母音記号が基字の上下左右に付く(図版1参照)。また子音が連続する場合など、基字を組み合わせた結合文字が使われる。基本的に26字(種)で事足りる欧文タイプと異なり、これらの複雑な文字を入力するには相当の工夫が必要となる。

この工夫の例をおおまかに説明しよう。デーヴァナーガリー文字タイプは、欧文タイプ改造型と和文タイプ改造型に大別される。前者はキーの数が限られるため「文字の重ね打ち」をする。タイプの改造は比較的簡単だが、結合文字の見栄えが悪い難点がある。後者は、もともと多くの文字種が打てる和文タイプを改造したものであり、母音記号を付けた基字や子音の結合文字が全て活字になっているので見栄えの良い文字を印字できる。ただし機構が複雑で、入力に熟練を要するのが欠点である。ちなみに今回は両種のデーヴァナーガリー文字タイプを展示できたので、両者の入力法の違いもご覧いただけたと思う。

●タイプライターを並べてみる

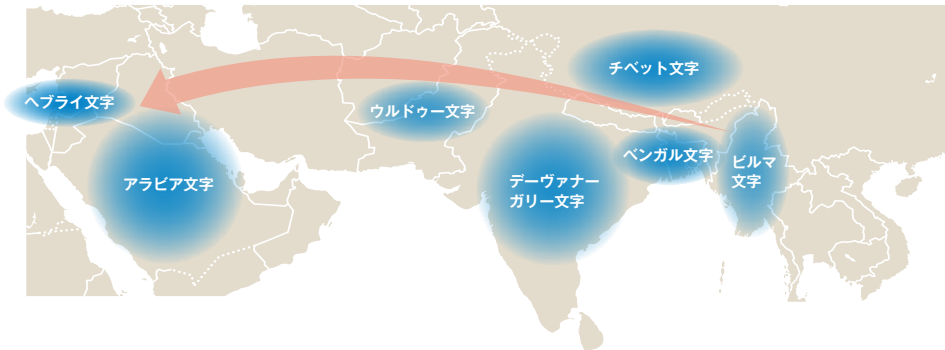
企画当初、研究所内の「貴重品管理室」(荒川命名)に存在したタイプライター(「文字名+タイプ」で示す)は、小さい方から並べると、チベット文字タイプ、ビルマ文字タイプ、デーヴァナーガリー文字タイプ中型、ベンガル文字タイプ、ヘブライ文字タイプ、デーヴァナーガリー文字タイプ大型の6種だった。当初は配置についてあまり考えもなく、ケースに入れて展示室にランダムに置こうとしていた。

企画が進むうちに、所内の某所で小型のアラビ

和文タイプ改造デーヴァナーガリー文字



各文字のおおよその使用地域（ほぼ矢印の順に各種文字タイプを並べた）



ア文字タイプが見つかった。また、東京外国語大学のウルドゥー語科から、ウルドゥー文字タイプを拝借できることになった。「天啓の導き」というと大げさだが、タイプの配置についてアイデアが固まったのはこの時だった。これらの文字は、おおよその使用地域で並べると、ビルマ → チベット → ベンガル → デーヴァナーガリー → ウルドゥー → アラビア → ヘブライ、のように、東から西に連綿とつながるものになる（上図参照）。これらを順路に沿って配置してはどうだろうか？ これまでに実施されたアジアの文字に関する展

覧会は、「旅（文字の伝播）」をモチーフとしていた。本展示ではタイプを通して、「東から西への文字巡り」ができるように工夫してみた（22～23頁の展示会場イラスト参照）。

実は最初、「インド系文字のタイプライター展」というタイトルを考えていたが、ウルドゥー文字・アラビア文字タイプが増えたので、タイトルを再考することにした。「インド系文字+アラビア系文字+ヘブライ文字」を包含する適当な単語が思いつかなかったので、最終的なタイトルはやや愚直なものになってしまった…

●タイプライターから文字と言語を考えてみる

文字の使用地域というポイントに加え、「タイプを通して言語と文字の関係に思いをはせてもらう」…ように配置を考えてみたつもりだ。

最初のコーナーでは、チベット文字タイプとビルマ文字タイプを同じケースに入れた。政治的・文化的なつながりが強いとはいえないチベットとミャンマー（言語名・文字名はビルマ）だが、言語的には「チベット・ビルマ語派」という言語グループに属する。そしてともに、言語系統的にはインド語派と異なるものの、インド系文字を改造した文字を使用している。

途中のコーナーは、デーヴァナーガリー・ウルドゥー・アラビア・ヘブライの各種タイプを隙間なく並べる感じで配置した。デーヴァナーガリー文字で書かれるヒンディー語は、ウルドゥー文字で書かれるウルドゥー語と系統的に極めて近い言語である。しかしウルドゥー文字はアラビア文字にさかのぼるものである。ウルドゥー語はアラビア語とは言語系統が異なるものの、イスラム教の影響もありアラビア文字起源の文字を表記に採用した。一方アラビア文字とヘブライ文字は、字形がずいぶん異なる。しかしアラビア語とヘブライ語は親族関係にある。ここでも文字表記を決定するのはイスラム教とユダヤ教という宗教であり、言語系統と関係しないことが見て取れる。

「文字の系統と言語の系統は異なる」「どの文字を使うかは、言語系統ではなく宗教的な影響が強い」こともこの展示から知っていただければと考えた。

かつて東京外国語大学の各語科にあった貴重なタイプライターは、2000年のキャンパス移転に伴い、ウルドゥー文字タイプを除き全て廃棄されてしまったそうだ。これを先見の明が無かったと非難するにはあたらない。今回自分でも運搬・設営に参加してみたのだが、タイプライターというものは、（展示会場ではあまりそう感じられないが）普通の室内では案外場所をとるし、結構な重量物である。PC、プリンターに駆逐されてしまうのは致し方ないと思う。とはいえ、アジアの諸文字についていろいろと考えさせてくれる貴重なタイプライター。残ったタイプは大事に保全し、後世の展示会で活躍してもらおう。

○ 展示会サイト：<http://www.aa.tufts.ac.jp/asiatypewriter2015/index.html>

タイプ操作法

*ここでは、底部の、入力できるデーヴァナーガリー文字の一覧表を「文字盤」、その上で上下左右に動く、活字の入った容器を「活字盤」と呼びます。

..... 1
ストッパーを外し、紙をセットします。

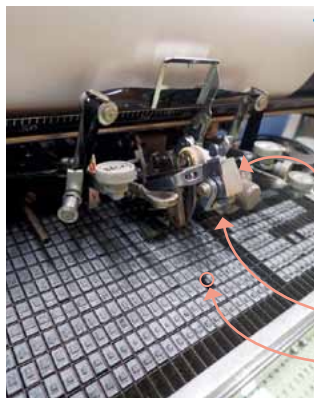
ストッパーを外すと上になる、金属製の用紙留めがね

..... 2
入力したい文字を文字盤から探します。活字盤を動かし、活字盤の正面にある凹字型のゲージが、文字盤上の、入力したい文字の所に来るようにします。

母音記号も含めて活字化されていることが確認できる

..... 3
凹字ゲージの中にある文字が、活字盤ではアームの真下に来ます。この時、活字盤の当該の文字の下には「突き上げ棒」が位置しています。活字盤の左右のレバーを思い切り下げます。

アーム下部

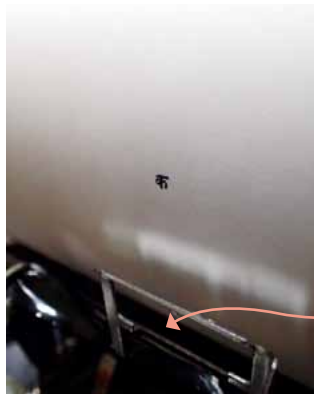


..... 4
突き上げ棒によって、当該の文字の活字、1文字分が上昇します。上下動するアームの直方体ソケット部分に、この活字が入ります。この活字を収めたままアームが上昇します。

活字を拾うソケット部分

活字を拾って上昇するアーム

突き上げ棒



..... 5
活字面がインクリボンを押さめます。紙と活字に挟まれ、インクリボンのインクが紙の表面に固着します。

インクリボン